

人権保育専門講座7（三重県委託事業）

「外国にルーツのある就学前の 子どもに必要な支援とは」

平野 知見さん（京都文教大学）



人権保育専門講座7は、京都文教大学の平野知見さんに「外国にルーツのある就学前の子どもに必要な支援とは」と題して、四日市、津、名張の3会場でお話いただき、54人の方に参加いただきました。ご自身の体験、日本における「多文化化」の現状や外国にルーツのある子どもと保護者についてのお話、絵本の紹介やグループワークなどをとおして、「多文化と接するとはどういうことか」「お互い影響しあい尊重しあうとはどうすることか」などの問いについて考える機会となりました。



1 自分の体験から

「公平」をキーワードに

私は1991年からオーストラリアへ留学しました。留学をきっかけに、大学で幼児教育について学び、多文化共生保育の現場で保育経験も積みました。これまでの経験から、私の中で「公平」をキーワードとして、人とかがわったり活動をおこなったりしています。

Mとの出会いから

私は、大学在学中及び卒業後、実習を含めて現地で働く機会を得ました。そこでM（3歳）と出会いました。会ったその日、Mは「あなたの宗教は何？」と私に聞いてきました。私は迷いながらも「無宗教だよ」と答えました。Mは「Oh! Sorry, Chimi!」（Chimi＝知見）と言い、続けて「それは寂しい。悲しい」と言いました。「宗教と共に生きていないことは寂しく、悲しいものである」ということを3歳の子どもは思っていたのです。私は、日本での日々の生活のなかで「宗教と共に生きている」と感じたことはありませんでした。Mとの出会いから「宗教とは何なのか」「文化とは何なのか」「人種とは何なのか」を考えさせられました。

II 「多文化教育」とは

（「国際理解教育」「異文化理解教育」との関係）

「多文化教育」に関連するキーワードとして「国際理解教育」と「異文化理解教育」についてお話しします。

「**国際理解教育**」は1950年代後半から提唱された教育です。国際理解と国際協力のための教育であり、外国語によるコミュニケーション能力を高める実践など、当時は「他国のことを理解しよう」という学習が行われていました。「○○国はこういうところ、○○国の人こんな人たち、○○国にはこのような料理がある」など、国のことを学ぶことが中心でした。「国際理解教育」は、国内における多様な民族や地域性のちがいを見逃してしまいがちになります。

そこで、同じ国の中でも、住む人の地域によってさまざまなことがちがってくるということに視点を当てた「**異文化理解教育**」が注目されていきました。

1980年頃、日本の企業が海外に進出することが多くなりました。それにともない、親の仕事の都合で、子どもたちも海外で一緒に生活するということができてきました。海外で保育園・小学校生活を送った子どもたちのなかには、日本に戻ってきたときに、日本の保育、教育、文化になじめない子どもがいました。こうしたことから、子どもたちの育った生活を尊重していく必要があるという考え方も出されました。

そうしたなか、アメリカのJ・A・バンクス（James A. Banks）が「**多文化教育**」の考えを提唱し、改革運動をおこしました。マジョリティの意見中心で動く世の中で、マイノリティの人たちの人権を尊重し意見を取り入れ、既存のものを大きく改革し、「多様な人種の生徒が平等の教育機会を経験できるようにすることを主要な目標とする教育改革運動」と説明しています。

国際理解教育

- * 1950年代後半から提唱された教育。
- * 1951年日本がユネスコに加盟
- * 教育目標:「Education for International Understanding and Co-operation」
国際理解と協力のための教育→文部省(当時)が「**国際理解教育**」と翻訳

〔内容〕

- ▶ **他国理解**学習が中心
- ▶ 外国語によるコミュニケーション能力の育成

異文化理解教育

- * 「国際理解教育」だと国内における多様な民族や地域性の違いを見逃す傾向
- ステレオタイプな認識
- 国家や国民をひとつの単位とする「他国理解」教育より、そこに住む人々や彼らの文化に注目する「**異文化理解**」の教育が注目される
- ・ 帰国生の文化的背景を尊重する

Banksの言う多文化教育

(J.A.Banks, (平沢安政訳)「入門多文化教育」1999)

「カリキュラムや教育機関を改革することにより、男女両性及び多様な社会階級、人種エスニック集団の生徒が平等の教育機会を経験できるようにすることを主要な目標とする教育(改革運動)」

↓
マイノリティの人権尊重

「多文化共生保育」については、いろんな専門家が定義をしています。宗教、民族、年齢、性別、ジェンダー、障がいの有無（障がい者⇒照街者）、文化（食文化・習慣）、社会階級など、いろんな領域を網羅しています。

中国出身のボランティアスタッフの方が、ご自身のお子さんから学ばれた経験から、「障がい者」のことを街を照らす者、「照街者」と書くとよい、と言っておられたことに心が揺さぶられました。



Ⅲ 外国にルーツのある子どもの現状と課題

入管法改正から 28 年…

出入国管理及び難民認定法（以下：入管法）が 1990 年に改正されました。入管法改正以降、外国の人が日本で働きやすくなりました。特に多くの南米の人が労働のために海を渡って日本に来ました。それに伴い、親と一緒に日本に来た、あるいは日本で生まれた外国にルーツのある子ども（多文化の子ども）がいます。工場の製造ラインの仕事など、親が昼夜を問わずに働いていることもあり、子どもも生活が不規則になっていて、2000 年当初は周囲の人々からも理解が得られず、課題が年々大きくなっていく状況がありました。

今では長期化・定住化が進んでいます。日本生まれの子どもも成長して親になり、その子どもが園・所に通ってくるようになっていきます。

2018 年 6 月に、多文化の子どもたちを特集したテレビ番組が放映されました。そこで紹介された、子どもや保護者が日本の学校で困ること（大量に配付されるプリントやお弁当、学校生活等）、それを解決しようとする取組（プリントの工夫や初期支援教室等）などが、が出会ってきた子どもや保護者の姿、学校等での取組と重なりました。



重要なお知らせであることを示す
ポルトガル語のスタンプ

保育現場では…

2000 年当時の保育現場で、「多文化とか難しいこと言わないで。ボディランゲージで伝わるよ。子どもたちは一緒にあそんでいるから分かりあえるよ」と私に話をしてくれた園長先生がいます。しかし、話を聞いている私のところへブラジル人の子どもがやって来て、笑いながら「だめ！だめよー！」と言って走り去って行きました。「あの子はいつも『ダメ』しか言わないんです」と先生が笑って話してくれました。

その園に通わせてもらっているうちにわかったのは、先生方が、その子が何かをする前には常に「だめよ」という声かけをしていることでした。「何か失敗するかもしれない」と、日本の子どもとはちがう見方をされていたのです。だから、その子が最初に覚えた言葉は「だめ」だったのです。このような否定的な言葉を常にかけていて覚え、その言葉ばかり使っている子が見受けられました。

長期化・定住化が進むなかで

生活の安定が見られるようになった反面、長期化や定住化が進むことで、言葉や文化の問題が浮き彫りになってきたと思います。私がオーストラリアにいた頃に、「この国で生きていくのなら、オーストラリア人になった方がいい」と言われました。日本人ということで文化・習慣のちがいや考え方のちがいなどでしんどいことも多々ありました。日本にいる多文化の子どもたちも同じような思いを抱えています。

「日本で育ったけれど、親はブラジルから来た。どっちが自分の土台となるところなんだろう」と、文化の問題で悩む子どもたちが増えてきています。また、コミュニケーションがとりにくくなっている親子もあります。子どもは日本の保育園や学校に通い、日本語での会話の方が上手になってくるケースが多いです。保護者から「会話が通じないので、ケンカもできない」と相談されたこともあります。

不就学の子どもについて、ニュースで取り上げられたこともありますし、高校進学もハードです。教育面での問題も大きいのです。



Nとの出会いから

目がキョロっとしていて、とても愛らしいN（3歳）。言葉もまだしっかり確立してなくて、言いたいことがあってもうまく言葉が出てこず、覚えた日本のキャラクター名を繰り返して声に出します。トイレの使い方も日本の子どもたちとは一風変わっていて、朝、トイレから周りの子の騒ぎ声が聞こえてきたこともありました。周りの子は興味津々ながら、ちがいに驚いたり戸惑ったりしていました。

夏のプール開放に参加するために、お母さんと一緒に水着を買いに行くことになりました。水着を着てプールで泳ぐ、という習慣を理解できないNのお母さんを説得して、無事に水着やバッグを買いことができました。翌日、園に行ってみると、プールに行っているはずのNが部屋で先生と遊んでいました。事情をきくと、「何があるか分からないから、やっぱりニハちゃんはプールを中止にしました」と言われました。「どうしてこんな理解の仕方なんだろう」とショックと悔しさでいっぱいになりました。

このことをお母さんに伝えると、静かに「ハイ、ハイ」と答えてくれました。私は「わかってくれたんだな」と当初は思ってしまいましたが、日本語があまりわからず、実は理

解されていないことの方が多いと気がつきました。遠足のお弁当づくりを母親に頼みに行ったときに、先生が折り紙で作ったおにぎりをお母さんに見せて説明をしました。お母さんの「ハイ、ハイ」という返事に、すごく嫌な予感がしました。遠足先で開いたNのお弁当箱の中には、手でちぎって形を整えた、折り紙で作ったおにぎりが入っていました。折り紙なんて買ったことのないだろうお母さんが、見よう見まねで作ったそのおにぎりを見て、笑っている子どもたちの横で、私は涙が出そうになりました。そんな私の表情から、周りの子どもたちは「笑っている場合じゃない」と感じたのか、Nに自分のお弁当を分けていました。この後も、お弁当の機会には「ロールパン」「ヨーグルトをかけたごはん」と、お母さんの、人生はじめてのお弁当作りへの挑戦が続きました。Nがとてもいい顔でお弁当を食べていた時には、思わず写真を撮りました。

やがて、Nたちは仕事の都合で母国に帰ることになりましたが、私は「何をやってきたんだろう」という思いになりました。私自身も文化や習慣のちがいで苦しんできたのに、Nやお母さんに対して何もできなかったことが、今でも心残りです。

退園の時、園長先生が「お母さんに通訳して」と言って、9割がた「良いこと」ではないことを話しました。「最後ぐらい良いことを話してほしい」と思いましたが、最後には「いい勉強になった」と言いました。日本語交じりの英語でしたが、実は私は、お母さんに園長先生の言葉そのままではなく、良いことを伝えていました。最後には玄関で泣きながら抱き合い、「力不足でごめん」とあやまる私に、はじめて日本語で「ありがとう」とつぶやいたお母さんが忘れられません。

IV 外国にルーツのある子どもの保護者の悩み

保護者がぶつかる3つの壁

言葉の壁

- ・連絡帳の内容がわからない、読めないプリントが大量に配付されるストレス
- ・日常会話で使わない独特の日本語（うわぐつ、ぞうきん、面談・懇談、避難訓練 等）

制度・文化の壁

- ・母子保健や保育・教育制度のちがい（予防接種、運動会、入園式 等）
- ・子育て文化や宗教等のちがい（厚着・薄着、男女の配慮、食事での禁忌 等）

こころの壁

- ・情報からの孤立による不安（他の保護者から情報が得られない）
- ・不信感による不安（私だけ冷遇、外国人だから差別されている）
- ・ちがいを排除する社会からの不安（母語・母文化を子どもに否定される）

事例から

- フィリピンでは地震の際、高台に向かってまず逃げるそうです。地震が起きたのに、じっとしていることはありません。でも、避難訓練で外に逃げ出す子どもたちを見て、「落ち着きがない」「話をちゃんと聞いていない」と思ってしまう私たちです。
- 日本では予防接種をその年齢やその時期がくると受けますが、そうではない国もあります。また、保護者は言葉の壁があるためにどのように手続きを進めたらよいかわからず、また誰にも聞くこともできず、予防接種を受けることができない子どもがいます。
- 運動会に向けて一生懸命練習をする外国にルーツがある子どもたち。保護者にも「運動会に来てくださいね」と声をかけましたが、当日はほとんどの外国にルーツのある子どもが来ませんでした。親戚のおじさんの誕生日だったので、パーティーに行っていたということでした。生活の中で何を優先するかについて、私たちと外国にルーツのある人との気持ちにギャップがあることが分かりました。
- 宗教上の都合で、豚肉が食べられない外国にルーツがある子どもがいました。ある日の給食の献立が「豚丼」でした。いつも通り除去食が用意されましたが、その子の前に置かれたのは白いご飯だけ。すると、その子は隣の友だちの豚肉をこっそり食べてしまったのです。保護者は大変怒って園にやってきて「この子が豚肉を食べることが、どういうことだか分かりますか。あなたたちは、知らずにネズミの肉を食べさせられたら、どう思いますか」とおっしゃられました。宗教と共に生きていくということ、先生たちがもう一度考え直すきっかけになりました。

「知らない」ということのこわさ、知ろうとする大切さ



これらの事例を見ても、知っていれば理解・対応ができるのに、知らないために否定的に見てしまうことのこわさを感じます。仲の良いご近所の子どもたちを送迎するローテーションの中で、外国にルーツをもつ子の保護者が他の子を殺してしまう、という痛ましい事件が起きたことがありました。決してあってはならないことですが、誰か一人でも様々な背景を抱えたその保護者のSOSを読み取ることができれば、最悪の事態にはならなかったのでは、と思います。

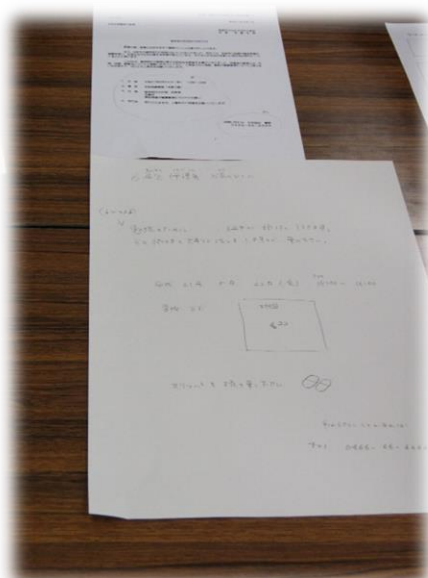
私たち周りにいるおとなが、どこまで歩み寄ってくらしやバックグラウンドを理解できるか。「わかってもらっているはず」「ちゃんと対応しているよ」という思い込みではなく、心のコミュニケーションが何より大切です。

V 「読めないお知らせ」(グループワーク)

【教材出典: かながわ開発教育センター(K-DEC) <https://kdec75.wixsite.com/kdec>】

日本語以外の言語で書かれたお知らせプリントを、「外国でくらすことになった家族」と設定したグループごとに、何が書いてあるか考えてもらいました。中国語はまだ漢字から推察できる部分もありましたが、ハングル文字、ポルトガル語など、他のものはほとんど読めませんでした。クメール語にいたっては、数字があるかどうかすら判断できません。

内容は、「入学金を指定の期日までに納めないと、入学することができなくなります」という、進路にかかわる非常に重要なお知らせでしたが、読めないお便りが毎日大量に届くなかで、これを大切なものと判断するのは困難です。「せめてわかる言語で『重要!』というスタンプが押してあれば…」 「時候の挨拶文や、分かりにくい言い回しをしないように」「文章を短く、わかりやすく」「イラストの活用」など、2つめのワークでは発信する側として、少しでも伝わりやすくする工夫について考えてもらいました。



VI 私たちおとなが・・・

最後に、「ええぞ、カルロス」という絵本を紹介します。大阪市立総合生涯学習センター「はーと&はーと」第8回人権絵本コンクールで大賞をとった作品です。外国から転入生がやって来ることが分かったときなどに子どもたちと一緒に読むと、「自分にできることはなんだろう」と考えるきっかけになるような絵本です。また、私たちに「多文化に接するとはどういうことなのか」「お互いに尊重し合うとはどのようなことなのか」といった、多文化共生保育を考えるきっかけも与えてくれます。



この絵本を読むと、「ちがい」に敏感なのは、子どもたちではなくて、私たちおとなだということを感じます。子どもたちは、おとなに影響されることがとても多いです。おとなの話が子どもが聞けないうちに、話の内容から偏見につながる可能性ももっています。「ちがい」は、「まちがい」ではないということを、私たちおとなが子どもたちに伝える必要があります。「ちがい」は「まちがい」ではないということをまずは私たちおとなが認識する必要があります。

VII 参加者アンケートより

- 自園では40%を超える外国籍の子が在園しています。より身近に感じたと共に、自分自身の取組の課題も明確になったように感じました。差別をなくそうと取り組んでいます。そのことが今、自分がかかわっている子どもや保護者にどうつながっているか考えていきたいです。
- 自分が勤めている園にも、3～4割外国籍児がいます。事例の二ハちゃんの話を読み、「あるある」と共感することばかりでした。手紙では簡潔にわかりやすくしたり、ルビを付けたりして、少しでも日本語にふれていただけるよう工夫しています。
- 「～の国は～が好きだから、～が上手でしょ」という決めつけは、人権にかかわってくるなと感じました。私もそういう思いをもって外国の方を見てきている部分があったため、保育の中でも意識していきたいと思います。外国の方が日本に合わせるのではなく、お互いに、お互いの文化を理解し合える仲になっていけるよう工夫していきたいです。
- 2年の付き合いになる外国籍の保護者との関係で日々悩むところがあるのですが、今日話を聞かせて頂いて、「自分の向き合い方はどうだったのかな？」と考えさせられました。相手の立場に立てていないのかなと改めて感じました。今から小学校に行くまでに、自分ができることをしていけたらいいと思います。
- グループワークの時間もあり、参加者の悩みを聞いたり、共に考え合ったりすることができよかったです。実際に自分が外国籍の立場になって考えることができ、こんなに不自由な思いをさせているんだと感じることができ、伝え方をどう工夫するか、あらためて考えることができました。